ユスト高山右近の生涯と信仰 ㊸

秀吉の死と家康の台頭

1597年2月5日(慶長元年12月19日)、西坂の丘で26人の処刑が執行されました。これが日本26聖人の殉教でした。

その後も秀吉は、キリシタンへの迫害の手をゆるめませんでした。しかし、朝鮮侵略(慶長の役)が思わしくないなか、秀吉自身が病に倒れてしまいました。慶長3(1598)年8月18日、伏見城で秀吉は63年の人生に幕を降ろしました。

その知らせは、朝鮮に出兵していた大名たちのもとにすぐさま届きました。そしてその年の11月末までに、撤退が完了しました。

秀吉の死の7ヵ月後、前田利家が62歳でこの世を去りました。死を前に、利家は跡継ぎの利長に「右近はほかに心を移すことなく、私に心から尽くしてくれた律儀な人だ。これからも茶代として禄をさずけ、情けをかけてやるように」(「高徳公(前田利家)遺誡」原漢文、「加賀藩史料」所収)と遺言したと言います。また、夫人の芳春院が北政所を訪ねた際、「見栄も飾りもなくひょうひょうとした右近に魅せられた利家は、できるなら自分もキリシタンになりたいと語った」と、夫の胸の内を伝えたと言われています。

秀吉の死後、政務は五大老・五奉行の合議になったのですが、五大老の筆頭であった利家の死により、もう一人の筆頭である徳川家康の勢力が拡大していきました。利家は、家康の独裁体制の危険性を十分に察知して、利長に3年は大坂を去らないようにと遺言しましたが、老獪な家康に体よくあしらわれ、金沢に引き上げざるを得ませんでした。右近も利長に同行して、金沢へと戻りました。

ところがすぐに、増田長盛らが、利長が家康を討とうとしているとのうわさを流しました。これは、家康が加賀へ攻めている間に、背後から利長を討つためと思われています。実際、家康はそれを信じ、丹羽長秀に軍勢を率いて金沢に向かうよう命じることに決めました。

利長の義兄弟宇喜多秀家は、急使を送りその動きを金沢に知らせたので、利長は家臣を集めて協議し、右近と筆頭家老横山長知らを大坂に派遣し、家康に謀反の意図のないことを弁明させることにしました。

家康は長知とだけ会いましたが、主君の無実の訴えを信用しませんでした。利長の母、芳春院を江戸に人質として送ることで、ようやく事なきを得ました。

利長は、家康の態度に不信を抱き、万が一に備えて、金沢城を本格的な城郭へと改修することにし、右近にその任務を委ねました。

右近は、金沢城北側に新丸を設け、東にあった大手門を北に移し(尾坂門)、城の周囲を全長3キロメートルの内惣構で囲い込みました。そのような大工事を、なんと27日間で終わらせたのです。右近の指導力と築城技術の高さを証明する仕事でした。

家康が力を持つことに不満を募らせる石田三成や小西行長と、家康の間に軋轢が生まれ、やがて天下分け目の関ヶ原合戦へと、時代は風雲急を告げます。

「カテキズムの学び」

第25回 新型コロナウイルスとカテキズム(その5)

新型コロナウイルス感染拡大下の生活様式において私たちが痛感したのは、「バーチャル」の進歩と「リアル」への渇望でしょう。ミサのライブ配信に与ることができるのは素晴らしいことですが、教皇フランシスコは「バーチャルな放送は、聖体祭儀における主の真の現存にとって代わることはできない」(『交わりと希望』序文)と警告され、「教会をバーチャルなものに変質させる危険にさらさないためにも、皆がまた一緒に戻れるように、わたしたちはこのトンネルから抜け出さなくてはならない」(2020年4月17日)と述べられました。コロナ後の生活を考え始めている今こそ、教会生活におけるリアル、現実への回帰を始めるときです。

キリスト教の醍醐味は、「キリストは……人間と同じ者になられた」(フィリピ2・6～7)という点です。復活したキリストが強調されたのもその点でした。

> 復活したイエスは、触らせたり、食事をともにしたりして、弟子たちと直接に交わられました。こうして、ご自分が亡霊ではないことを認めるよう、またとくに、弟子たちにはからだを見せ、そのからだが苦しみを受け、十字架につけられたからだと同じであることを納得させようとしておられます。(645番)

キリストは現実の人間となり、現実の人間に復活され、神性と人間性を保った現実として聖体の秘跡において今も現存し続けておられるのです。

> 聖別によって、パンとぶどう酒の実体はキリストのからだと血の実体に変わります。聖別されたパンとぶどう酒の形態のもとに、生きておられる栄光のキリストご自身が真に、現実に、実体的に、からだと血、霊魂と神性ともども現存されます。(1413番)

ミサに与ることができないときにこそ、教会を訪れて聖体訪問をし、そこに現実におられるキリスト、「二十世紀も前からあなたをお待ちである」(聖ホセマリア・エスクリバー『道』537番)イエス様とのリアルな出会いを味わいたいものです。

(文　酒井俊弘補佐司教)

【図書紹介】

『句集 神の手』(酒井湧水、文學の森、2021年、税込2860円)

「酒井湧水」の俳号をもつ酒井俊弘補佐司教が、句一覧集、ホトトギス新歳時俳句を始めて十年を機に、記一覧、特製しおりが『おまけ』として付いてくる。俳句集にまとめられた。

「信」「望」「愛」「神の手」の4つの章からなり、信仰を題材にした句はもちろん、写生句や人事句もすべて、神のうちにあって詠むという師の祈りの姿勢が感じられる。

句集の最初の句は、「シリウスの青き静寂や絵踏の夜」。毎年旧正月に踏み絵を強いられた隠れキリシタンの姿に思いを馳せた句だ。その他、酒井司教のユーモアと温かい人柄がにじみ出てくる句が満載。

句集を初めて手に取る読者のために、50句の解説、ふりがなと季題(季語)を示した全句一覧集、ホトトギス新歳時俳句を始めて十年を機に、記一覧、特製しおりが『おまけ』として付いてくる。俳句であらわされる新鮮で奥深い神の世界を、一度味わってみてはいかがだろうか。(大阪梅田サンパウロ、玉造ピエタで販売中。お問い合わせは教区事務局・教会事務課まで)

「生きる」―難民移住者

悩ましい立場の支援者

ルさんは父親とともに宗教弾圧の激しい中国から日本に逃れて来た難民申請者です。父娘は来日した日に入国管理局(入管)に収容されましたが、重い心臓病と糖尿病を患っていた父親は、収容中に合併症を引き起こし亡くなりました。ルさんは損害賠償を求めて提訴しました。

その第二回公判の日のこと。裁判官が閉廷を告げて起立しかけたその時、原告席のルさんが「チョトマッテ!」と法廷に響く声で場を制し、法廷内にいた全員が中腰のまま彼女を見ると「オ父サン何故死ンダ、証拠、ココニアリマス」と主張し始めたのです。慌てた弁護士がルさんを説得し、裁判官たちは法服を翻して去ってゆきました。ルさん提訴の記事が新聞で報道されたのですが、弁護士はそれを一切知りませんでした。また公判後にマスコミの取材を受けましたが、これも弁護士そっちのけで、ルさん自らがとめどなく語り続けました。弁護士は、まだ難民申請中のルさんの身を案じて注意を促すのですが、昂る思いを抑えられないルさんは止まりません。そこで私がルさんより大きな声で「今日はちゃんとした通訳もいないし、間違った報道をされたら危ない。別の日に皆さんにお話を聞いてもらいましょう」と言いました。ルさんは取材を打ち切った私に抗議しました。

支援者は、常に当事者の意向に沿って動き、本人の言論や行動の自由を妨げてはならないと思います。ただ、明らかに当事者の不利益になると推測される時には介入する必要もあります。今回、私はルさんの詰めの甘さを恐れて割って入ったのですが、それが正しかったかどうかはわかりません。

ルさんは日本の裁判方式をよく知らず、法廷では場違いなことをしたように見えました。でも彼女の父への無念の声と涙は、明らかに法廷にいた者の記憶に残った筈です。あの姿を見ると、マスコミへの訴えも成り行きに任せてよかったのかもしれません。

支援する立場の悩ましさを痛感した一日でした。

(文　シナピス事務局　ビスカルド篤子)

カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。

詳細は資料をお送りさせていただくほか、インターネットでもご覧になれます。教区ホームページ右上のこのバナーをクリック▼

カトリック墓地 納骨堂・納骨所

資料請求やお問い合わせは
教区本部事務局　管理課　竹中まで
☎ 06-6941-9705